

『人が育つ』

青少年活動の果たす役割～アクションプラン策定に向けて～



2020年3月
兵庫県青少年
団体連絡協議会

【企画記事】

- ・この人に聞く①…P3～
塚本 哲夫・六甲バター株式会社 取締役会長
- ・この人に聞く②…P7～
高梨柳太郎・神戸新聞社 代表取締役社長
- ・この人に聞く③…P11～
加藤 恵正・兵庫県立大学大学院教授
- ・この人に聞く④…P15～
日野健太郎・(一財) 野外活動協会主事
明星 賴子・(一社) ガールスカウト 兵庫県連盟理事



2019年度
(公財)兵庫県青少年本部補助事業

『人が育つ』 青少年活動の果たす役割

～アクションプランの策定に向けて～

Contents

はじめに	2
------	---

【企画記事】

ダイアローグ この人に聞く①	3
----------------	---

塚本 哲夫・六甲バター株式会社 取締役会長

ダイアローグ この人に聞く②	7
----------------	---

高梨 柳太郎・神戸新聞社 代表取締役社長

ダイアローグ この人に聞く③	11
----------------	----

加藤 恵正・兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授

ダイアローグ この人に聞く④	15
----------------	----

日野 健太郎・(一財) 野外活動協会(OAA) 子ども若者育成担当

明星 賴子・(一社) ガールスカウト兵庫県連盟理事

関連データ集	19
--------	----

最後に(提言)	20
---------	----

青団連について／調査研究委員名簿	21
------------------	----

はじめに

井上 真二
兵庫県青少年団体連絡協議会 代表理事
公益財団法人神戸 YMCA 総主事



すべての青少年が 心も身体も健康に育つ 兵庫を目指して

兵庫県青少年団体連絡協議会（以下、青団連）は兵庫県内で活動する23の青少年団体で昭和42年（1967年）から現在にいたるまでの歩みを続けております。この協議会が発足してから50年、時代の変化とともに求められる青団連のあり方について2017年から協議を開始し、2018年はミッション、ビジョンの再定義、規約、運営組織の見直をしてきました。そして今年度は新しい理念を掲げ、新しい組織での運営をスタートしました。

これまでの歩みを振り返り、社会の状況を踏まえ、子どもたちが健全に成長する「兵庫」であるために、心身ともに健康に育つ環境づくりや、体験活動を提供する青少年団体の活動が活性化していくことを支えていきます。そのための事業計画のひとつとして、青少年活動に関する調査研究事業が位置づけられており、今年度は調査研究委員会が、「『人が育つ』青少年活動の果たす役割」というテーマで行いました。じっくりとお読みいただき、それぞれの場でご活用いただけすると大変うれしく思います。

なお、私たちの活動を支え、活動を共にした兵庫県青少年本部は2018年度に50周年を迎えられました。兵庫県青少年本部と更なる連携をはかり、加盟団体の活動に寄与し、社会的認知を高めていくように努力をしていきます。これからも皆様のご理解、ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



六甲バター株式会社 取締役会長
つかもと てつお
塚本 哲夫 さん

Profile

昭和 17 年 2 月 13 日生まれ
関西学院大学商学部卒業。昭和 39 年 4 月に六甲バター株式会社入社、同 49 年取締役、同 60 年代表取締役社長、平成 27 年代表取締役会長、同 31 年取締役会長。チーズ普及協議会副会長、神戸経済同友会常任理事など歴任。平成 18 年兵庫県功労者表彰

聞き手

山崎 清治

兵庫県青少年団体連絡協議会 副代表理事
(NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)

鈴木 武

兵庫県青少年団体連絡協議会 理事
(日本ボーイスカウト兵庫連盟理事長)

岡本 光司

兵庫県青少年団体連絡協議会 前副会長
(兵庫県世界青年友の会会長)

(本文敬称略)

この人に耳を

Dialogue
No.1

組織が必要とする人間像とは

机上の勉強を最優先する教育に違和感

山崎：企業活動に携わる中で、青少年教育や支援のあり方をどう感じていますか。

塚本：勉強だけできればよいという、一筋のアスファルトの上を走っているような教育システムには、少し違和感を覚えています。

山崎：今の若者、例えば新入

社員について、昔と比べてどんな違いがあるのでしょうか。

塚本：良い意味で、屈託のない（物怖じしない）若者を見かけるようになりました。質問するのも、何かを欲しがるのもストレートで、本音をぶつけます。良し悪しは別にして、昔は遠慮や建前があってそんな若者は少なかったように思います。

家庭や学校の教育が変わったことが大きな原因ではないでし

ょうか。机上の勉強を最優先する教育で、これでは生きづらい子どもも出てきます。

失敗を恐れ、積極性失う若者多い

山崎：学校を出て社会で生きる上で、学力以外に必要なものは何でしょうか。

塚本：「生きる力」だと思います。会社では失敗を怖れて一步を踏み出すことができず、積

「生きる力」を培う教育を 人生にはレジリエンスが大切

極性を失っている若者を多く見かけます。社会人として、仕事をする中で何を学ぶかが重要で、こうした考え方は学校教育でも同じではないでしょうか。

山崎：やろうとする前に無理と考えてしまう発想では、新しい商品を生み出す原動力になりませんね。こうした消極性で責任を逃れようとする若者は、確かに近年多く見られます。

「一将功成りて万骨枯る」の思い

山崎：経営者として数々の新商品を開発し、成功されてきました。そうした斬新な発想はどこで培ったのですか。

塚本：私にそんな能力はなく、むしろ周囲がやってくれています。「一将（いっしょう）功成（こうな）りて万骨枯（ばんこつか）る」（一人の大将の功名は多くの兵士の痛ましい犠牲の結果という意）の通りですね。また、一人の優れた力に依存しては、周囲の力がダメになります。会社を成り立たせるには、経営者が立派すぎてもいけない。皆が知恵や実行力を發揮するためにどうすればよいかを考えることが役割と心得ています。

ほったらかしにする ことも必要

鈴木：「生きる力」は、逆境を乗り越える力につながります。かつての世代では上司に怒られても、なにくそと頑張るのが普通でした。今の世代は怒られると心が折れてしまう危険性もあります。

塚本：レジリエンス（跳ね返り、回復力などの意）という、したたかさが人生には大切ですね。これを養うためにも「生きる力」を教育に組み込むべきだと思うのです。

鈴木：どういう指導や教育をするかという面で、子どもに遠慮があるようになります。こうした姿勢では、子どもは将来に社会で生きていけるのか疑問を感じざる得ません。

山崎：これまで当たり前のように身についていた「生きる力」が、いま失われつつあるのかもしれません。これは青少年活動団体が真剣に向き合わないといけない問題で、学校外教育でいかに

伸ばしてあげができるかが、私たちの大きなテーマとなっているのが現状です。

塚本：「ほったらかしにする」ことも必要ではないでしょうか。P D C A サイクルのうち、Plan（計画）や目標は明確に伝え、Do（実行）、Check（評価）、Act（改善）は自分で考えてと突き放す。そうすると自然に失敗を学ぶことができるはずです。

山崎：家庭や社会では、危険が伴うため子どもに小さな失敗をさせられませんが、学校外活動で子どもたちに失敗させる機会を与えることが青少年活動団体の仕事ではないでしょうか。

子育ては 「どれだけ一緒に遊べるか」

鈴木：自身の子育てで、どんな教育を心がけてきましたか。

塚本：「子どもと一緒にどれだけ遊べるか」を大切にしてきました。三木市に住んでいましたが、山が近く、虫取りをして遊びました。土・日曜日はきちんと休み、自分なりに家族との時間を大切にしてきたと自負し



「生きる力」を教育で培う大切さを訴える塚本取締役会長（右から2人目）

ています。

岡本：「どれだけ子どもと遊べるか」。これは素晴らしい言葉ですね。

塚本：住んでいた場所も恵まれていました。都市に近い多自然地域で、子どもと一緒に遊べる場所があったのです。

岡本：習いごとが忙しく、親も働いて家にいないという世の中で、どのように子どもと一緒に遊ぶかを真剣に考えなくてはなりません。

教育は 「土と一緒に遊ぶこと」

塚本：私は、教育は「土と一

緒に遊ぶこと」

だと思っています。植物とのふれあいや米づくり体験のみならず、さらに視野を広げて農林水産の第一次産業を教育の中に取り込んでいくべ

きではないでしょうか。勉強をする傍ら、自然の中で土にふれ、泥んこで遊ぶという人間づくりをめざしてほしいです。

山崎：確かに、いまの子どもたちは土にふれる体験から遠ざかっています。紙とペンだけで

なく、農林水産業のどれかに従事することが大学卒業の条件の一つにするといった工夫も面白いですね。

塚本：しそう兵庫県宍粟市の県立山の学校を視察したことがあります。大変興味深く感じました。日本



右から鈴木青団連理事、山崎青団連副代表理事、塚本取締役会長、岡本青団連前副会長、永友青団連事務局

素直で自由な、屈託のない子どもを

の森林は世界有数の資源量を誇りますが、管理が行き届かずには林業の衰退を招いています。これをきちんと管理して林業を再興していくべきで、もし若いころに林業を体験していれば、会社を退いた後に第二の人生の舞台として活躍しようと思うきっかけにもなります。

これからの青少年活動 「お祭り」が必要

山崎：青少年活動をする団体にアドバイスをいただけますか。これからの活動には何が必要でしょうか。

塚本：「お祭り」だと思います。大人が抑え過ぎず、子どもたちが自由に楽しめる活気のある祭りです。かつては大小さまざま祭りがありましたが、現在はすいぶん少なくなりました。

山崎：ワールドカップやハロウィンの際の渋谷など、きっかけがあると若者たちは一ヵ所に集まって盛り上がっていますが、この様子を見ると、エネルギーを発散し、互いに気持ちを

高め合うきっかけを欲しているとも思えます。反面、大人たちはそのきっかけを与えることに怖れを抱いているのではないかでしょうか。

塚本：子ども、若者たちにはもっと素直に、縛られず自由に生きてほしいです。まさに、屈託のない子どもになってもらえば。そのための青少年活動をうまく進めんねればと願っています。

この人に恥じ

組織が求める 今後のリーダー像とは



岡本 光司

失敗経験が「生き抜くしたたかさ」に

大人も子どももこの世に生まれいつかこの世を去っていく。

「人生」をどう過ごすか。「幸せな人生を送るには」。

真似る、学ぶ、体験する、生きる、考える、役に立つ。

- ・真似なければ できない

- ・学ばなければ 分からない

- ・体験しなければ 身につかない

- ・生きる力を養わねば 生きていけない

- ・考えなければ 進めない

- ・人や社会のお役に立ってこそ 幸せが

与えられたレールの上をただ真っ直ぐに進めばいいのか。

おもむくままに発言し、振舞えばいいのか。

机上の勉強だけで生きていけるのか。

家庭、学校、地域社会が子どもの成長のために果たさなければ

ばならない役割は何なのか。

自由気ままもいいが、礼儀としつけ節度を保つ様も必要。

親はどれだけ子どもと一緒に遊べるか!!

土に触れ、木に触れ、虫に触れ 自然から学ぶ。親から学ぶ。

失敗の経験がなければ「生き抜くしたたかさ」は得られない。

学校外教育を担う 青少年リーダーの条件

世の中にはいろいろの人があり子どもたちに良きにつけ悪しきにつけ影響を与えている。

青少年団体活動は学校外教育という大きな役割を担っておりその役割は益々重要性を増しています。

子どもたちが、健康で、積極的に群れ、生きる力を身に着けることの出来る活動。

このような活動の出来る団体

を経営し、その活動を支えるリーダーの養成を行います。

求められる青少年活動リーダーの条件は、

- ・誇りと志を持って気品ある振る舞いをする

- ・清らかで謙虚な気持ちを持ちありがとうと言える

- ・自分の存在に意味を与える「生きがい」を持てる

- ・未知のことに出会ったときに「勇気」を持って立ち向かう

- ・今自分にできる最善のことを求める

- ・責任を重んじ、誠心誠意を持って事に当たる



神戸新聞社 代表取締役社長

たかなし りゅうたろう

高梨 柳太郎 さん

Profile

昭和31年2月10日生まれ

早稲田大学政治経済学部卒業。昭和54年4月に神戸新聞社入社、平成18年編集局社会部長、同22年地域活動局長、同24年取締役（営業本部長、販売・営業担当）、同29年専務取締役 統括、財務担当 デイリースポーツ事業本部長、同31年2月代表取締役社長

聞き手

鈴木 武

兵庫県青少年団体連絡協議会 理事
(日本ボーイスカウト兵庫連盟理事長)

速水 順一郎

兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問

(本文敬称略)

この人に耳を貸す！

Dialogue
No.2

社会が必要とする人間像とは

大震災の教訓継承へ 大学生と連携事業

鈴木：今の若者について、どのような印象をお持ちですか。

高梨：地元新聞社として阪神・淡路大震災の教訓を引き継ごうと、震災を経験していない大学生と「117K O B E ぼうさい委員会」を2014年から実施しています。学生が心肺蘇生法インストラクターの資格を取得した

り、避難所の運営などを学ぶとともに、小・中学校への出前授業も行う事業で、これまで17大学約80人が参加しています。

また、地域で生きる若者を育てようと、地元企業が抱える経営課題を学生特有の柔らかい発想で解決をめざす「Mラボ課題解決ラボ」も展開しています。これらの事業に参加する若者を見ると、勉強やサークル活動、アルバイトなどでとても忙しく

過ごしている風で、真面目で大したものだと感心しています。

剣道部の先輩や仲間にたくさんの教えと支え

鈴木：子どもの頃はどのように過ごしになりましたか。

高梨：大阪府堺市の生まれ。田んぼのある田舎町で少年時代を過ごし、中学から高校、大学にかけて剣道に熱中し三段まで昇格しました。また、中学時代

子どもの才能は親が褒め育てる 青少年活動指導者も長所見出す役割を

は海外特派員に憧れてマスコミ志望となり、大学では公害問題などから地方政治に関心を持ち、これがきっかけで神戸新聞社に入社しました。

鈴木：夢を抱き、志を持って歩まれてこられたようですね。

高梨：小・中・高校と先生に恵まれ、よく相談に乗ってもらいました。特に剣道部の顧問や先輩、仲間に随分と助けてもらいました。団体組織はチームワークが求められるため、上下関係などの礼儀には厳しいですが、互いに支え合う意識が強く、たくさんの教えをいただいたことに感謝しています。

父の教え 「人の嫌がることをやる」

鈴木：ご両親からのアドバイスはありましたか。

高梨：父親からは「人の嫌がることをやりなさい」と教えられてきました。皆がやりたがらない仕事を自ら手をあげて率先すると、見てくれている人は必ずいるといつも話していました。

鈴木：昨今の親について、どう思われていますか。

高梨：子どもの教育に過度に入りすぎる例がある一方、親の

優れた指導によって子どもの才能が花開くケースも多いことを芸術家や文化人との交流を通して知りました。親が子どもの特技や才能を見つけ、褒めて伸ばしてあげる教育です。

親の喜びをバネに 子どもの才能が開花

高梨：例えば元陸上競技選手の朝原宣治さん、伊東浩司さんは子どもの頃、出場した大会の成績が新聞に掲載され、それを見た親が歓喜したことに触発され、もっと喜ばせたいと練習に励んだと語っています。子どもの才能に親が喜び、褒めてあげることは勉強だけでなく、スポーツや芸術の世界でも重要なことだと感じました。

鈴木：それこそ、子どもの一番身近にいる親の務めですね。また、青少年活動の指導者も、その役割を担うことができるのではないかでしょうか。

高梨：確かに、団体の指導者も子どもと接する際に長所を積極

的に見つけ、褒めて伸ばしてあげることは重要です。褒める、褒められるというのは、言った人より言わされた人の方がよく覚えているものですよ。

失敗しても 腐らず前向き姿勢で

鈴木：新入社員の採用の際は何か特別に留意すべきことはありますか。

高梨：記者は新聞やネットニュースに关心が強い人材を選ぶことが大事だと考えています。採用後は研修がありますが、それよりも先輩に連れられて現場を歩き、一緒に取材しながら教わっていくことが重要で、そうした経験を5、10年と積み重ねて仕事を覚えていく世界と言えます。

鈴木：失敗したり、落ち込んだりした時はどうやって乗り越えてきたのですか。また、その力をどのように養うべきでしょうか。

高梨：失敗しても、やる気をなくして腐ったりしないことが



左から高梨代表取締役社長、速水青団連顧問、鈴木青団連理事、永友青団連事務局

大事です。自分の思うようにいかなかったり、仕事が気に入らなくても、きちんと前向きに取り組むことが重要で、次第に新たな発見に気づいたり、面白くなってくることもあります。

速水：父親が説いた教えが生きていますね。

鈴木：『世の中には無駄なことは何もない』と諭す人がいますが、そう考えればさまざまなことを乗り越えていけるのではないかでしょうか。

鈴木：指導者の理想像とはどういうものでしょうか。

高梨：一人ひとりの良い部分を見つけ、伸ばしてあげる目配

りや働きかけができる人ではないでしょうか。後輩は先輩の背中を常に見ている。そのことを肝に据え、自分を律していくことが求められていると思っています。

ネット社会に警鐘 好みで情報偏る傾向に

速水：昨今の子どもは体験が不足していると言われますが、今の若者を見て心配に思うことがありますか。

高梨：ネット時代となり、ゲームなどに没頭して読書量が減っていることです。ネットは自分の好きな分野に関連するニュ



ースが優先的に流れてくる仕組みで、好みの情報ばかりを選んで閲覧していると自分の世界は高まりますが、それ以外の情報

ネット時代だからこそ新聞・読書の重要性見つめて

は希薄になって情報に偏りが出てきます。

キーワードは 「共生し、地域で生きる」

高梨：今やネットは重要なツールで手放せませんが、使い方を考える必要があるのでしょう。そしてネット時代だからこそ、さまざまな情報や意見を幅広く取り入れることができる新聞や読書の重要性を見つめ直すべきだと思っています。

鈴木：新聞を読めば、いろんな情報が多岐にわたって入手できますよね。

高梨：ネットは反対意見や異なる考え方を排除する傾向が強く、社会の分断を生むきっかけにもなりかねません。向かうべきは共生社会であり、団体に所属している人と付き合い、ネット以外にも新聞や読書で見識を広げることが重要です。

鈴木：また、新聞や読書は自分で物事を考える力が高まり、思考を整理することができるの

ではないでしょうか。

高梨：「共生し、地域で生きる」。これが社会のキーワードで、その仕組みを作っていくことを応援していきたいです。青少年活動は人ととの関係を育み、共生の心を育ててくれます。さらに自分の夢を実現するためにも、若い頃から新聞や読書に慣れ親しんでもらいたいと思っています。

この人に恵む

青少年の指導は 一人ひとりの特性みつめて



鈴木 武

良き先生との出会い、良き先輩・後輩との交わり

冒頭、高梨社長は神戸新聞社と大学生との交流事業にふれ、参加した学生について「まじめで熱心」と高く評価されており、いわゆる“今どきの若者”に悲観的な意見を想定していた者にとってうれしい誤算でした。

温厚な人柄で、中学から大学にかけて剣道に熱中し、一本筋の通った“つわもの”とお見受

けしました。小学校時代は海外特派員にあこがれ、大学では社会問題に关心を寄せて新聞記者の道を選択されました。進路選択には尊敬すべき先生方から助言をもらい、自由に話し合い刺激し合う先輩・後輩にも恵まれたのでしょう、彼らから多くのことを学び大いに影響を受けたと述懐されていました。

「ムダなことなどひとつもない」

また、口数の少ない父親からは、「人の嫌がることを進んでやりなさい」という心に残る教えを受け、現在も自身を支える礎となっているそうです。

今、職場環境の中で“すぐに切れる大人”が話題になっています。この問題に関連して、「生きる力とは何か」を尋ねたところ、「どのような仕事であろうと、腐らずにやりこなす力では

ないか」という答えが返ってきました。自分に合っていない仕事だと感じても、やり続けることで必ず新たな発見があると説きます。自身の体験を通したこの金言を聞いて、比叡山延暦寺の千日回峰行を2度やり遂げた天台宗大阿闍梨・酒井雄哉氏の「ムダなことなどひとつもない」という言葉を思い出しました。

人生山あり谷あり、どんな境

遇に直面しても決して腐らずに新たな発見を経験することで、将来がみえてくるのではないでしょか。世に問い合わせたい言葉です。

特徴や長所短所 探り接する指導を

青少年の教育指導にどのような考えを持っているのか聞いたところ、子どもと一番身近に接しているのは親で、親が子どもの良い点を褒めながら教育するのがよいときっぱりと返されました。まずは家庭での教育が肝心ですが、子どもたちを指導する青少年団体も一人ひとりの子どもの特徴を見つめ、長所短所を探りながら接するという指導の原点を再確認した思いです。

これからも、真っ直ぐに振り下ろした太刀筋のごとく鋭い切れ味の提言、助言を頂戴できればと心から願っています。



兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授

かとう よしまさ
加藤 恵正 さん

Profile

昭和 27 年 6 月 16 日生まれ

慶應義塾大学経済学部卒業、神戸商科大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退。経済学博士。都市や地域の盛衰メカニズムを研究し、特に衰退地域の変化・再生に関心を持って国際比較研究を行っている。平成 17、26 年兵庫県功労者表彰受賞（震災復興、教育）

聞き手

萩本 義郎

兵庫県青少年団体連絡協議会 監事
(いえしま自然体験協会常務理事)

岡本 光司

兵庫県青少年団体連絡協議会 前副会長
(兵庫県世界青年友の会会长)

(本文敬称略)

この人に耳を貸す！

Dialogue
No.3

社会が必要とする人間像とは

**将来に希望持つ若者
日本 6 割、米国 9 割**

萩本：現在の青少年への思いや、青少年を健全育成する理想的な取り組みなどについて教えて下さい。

加藤：阪神・淡路大震災や東日本大震災などの被災地では、子どもや青少年を希望や幸福の象徴だと感じている被災者が多くいます。宮城県女川町で被災

した子どもを支援する N P O 団体を取材した際、若いスタッフの多くが会社や役所を辞めて従事していましたが、社会課題に挑戦しているという満足感と清々しさを持ち、こうした若者が活躍する社会だととても希望があると感じました。

内閣府の調査によると、将来に希望を持っている日本の若者は約 6 割ですが、米国は 9 割を超え、アジア諸国や欧州は 8 ~

9 割と日本の低さが際立っています。多くの若者が希望を持てず、将来への展望がないこうした状況をどのように考えたらよいのでしょうか。

**幸福の要素で見る
子どもに必要なもの**

加藤：この背景には、凝り固まったルールが張り巡らされた日本社会の仕組みがあるのかもしれません。希望を持つ若者が

「自己決定力」発揮できる環境を 信頼関係、きずな育む教育へ

少ないという状況は、今の日本社会の雰囲気を投影しているようにも思えます。

幸福の要素を分析したある研究によると、「所得」「健康」に加えて、自分で物事を決められる「自己決定力」が大変大きく影響していると分かりました。日本の社会、または学校では、子どもたちが「自己決定力」を存分に働かせる環境にあるでしょうか。自分で決めるという行動はわくわく感を抱かせ、満足感につながるほか、失敗しても自ら決めたことだと受け入れられます。女川町の若者たちに感じた清々しさの要因かもしれません。社会や学校で子どもたちがもっと「自己決定力」を発揮できる環境をつくってほしいと願っています。

子ども一人ひとりの個性、自由な発想大切に

加藤：神戸市垂水区と明石市にまたがる明舞団地は高齢化が進んでいます。そこのある飲食店経営者は「お年寄りを高齢者とひとくくりにしないこと。これは顧客としての高齢の皆さんをリスペクトするビジネスモデルの根本」と指摘していました。

これは子どもたちも同様で、一人ひとりの個性や自由な発想を制度的に担保した教育が求められていると言えます。

人と人が連携するイノベーション担うには

加藤：学界では今、「ソーシャルキャピタル（社会関係資本）」という概念が注目を集めています。これは人と人との信頼関係、きずななどを指していますが、このソーシャルキャピタルをどう築き、育んでいくかを大事に考える社会であってほしいと思います。

ロンドン大学のリンダ・グラットン教授は、自分の息子たちへのアドバイスをきっかけに「ワーク・シフト」を著しました。激変する社会で、若者たちの「働き方」がどうなっていくのかを、仕事の世界で必要な3つの資本、「知的資本」「人間関係資本」「情緒的資本（自分自身の選択について深く考え、実際の行動に向けた強靭な精神を有していること）」から論じた

ものです。特に、人間関係資本は、生活に喜びを与え知的刺激の源泉にもなる。孤独に競争するのではなく、イノベーションを「協力」しておこすというものです。また、情緒的資本は、際限ない消費生活から「情熱」をもって何かを生み出す生活への転換が始まると予想したのです。子どもたちの未来を考えると、今後はこれらの能力を育てることができる社会を築くことが重要になるでしょう。

仙台市・神戸市では… 子どもが失敗を学び そして創造力を培う

加藤：災害復興で生み出されたイノベーションで、最近新しい発見をしました。それは、子どもたちの可能性を見出す仕組み、仕掛けが大きく動き始めたことです。

仙台市のINTILAQ東北イノベーションセンターでは、子どもたちがいろんなアイデアを持ち寄って起業を試みるチャレンジ事業に取り組んでおり、とても人気です。子どもたちの起業



左から上野青団連事務局、萩本青団連監事、岡本青団連前副会長、加藤教授

計画を本物の銀行員が審査したりするのですが、大抵はうまくいきません。しかし、ここで学ぶことは、いわば失敗することなのです。人生で直面する挫折や困難に、どのように向き合い、乗り越えていくのかを学ぶ場なのです。

子どもたちをキーワードに地域の再生を図るという発想は、阪神・淡路大震災を経験した神戸では、デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）が拠点となっています。ここでは、子どもたちが「知る、考える、つくる、伝える」というプロセスから創造性を培う場となって

いるのです。巨大災害を受けると人間は希望や幸せの象徴である子どもに目が向き、もっとしっかりと育てようという意識を再確認するかもしれません。

個性、得意分野を把握して育てる大切さ

加藤：英国のあるホテルが社会ビジネスとして運営されているということで視察にうかがったことがあります。働いているほとんどの人は障がいを持っておられるのですが、ホテルにはたくさんのタイプの業務があり、それらを経験することで自分がどのような仕事に向いてい

るのかを探し、そして得意な仕事を磨いて社会に巣立っていくということでした。一人ひとりの個性や力を顕在化していくという姿勢が強く印象に残っています。

子どもへの虐待や不寛容姿勢に強い疑問

加藤：19世紀の英國にイザベラ・バードという女性探検家があり、日本を旅して「この国ほど子どもたちを大事にする国を見たことがない」と書きました。その同じ国でなぜ今、子どもを虐待したり、電車の中でベビーカーの母親に不寛容な姿勢や行

新たなイノベーション展開の軸に

動を取る出来事が起こっているのでしょうか。とても情けなく、残念に思います。

社会の厳しさ学び力強い若者の育成を

岡本：人手不足という日本の現状を見据え、子どもをどう育成すべきでしょうか。

加藤：少子化社会にあって、子どもたちを大切にすることは重要ですが、生きていくうえでの厳しさも学ばせることは必要で、そういう力強い若者を育することが求められています。

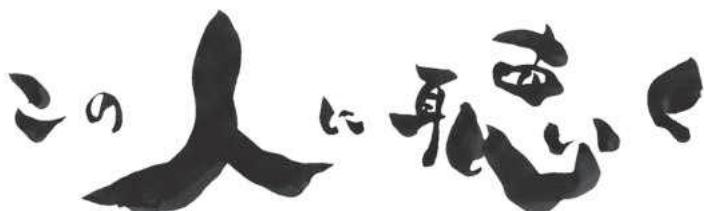
大学の授業で、留学生は英語

でアグレッシブに質問してきます。社会ではさまざまな人と力強く対等にやり合える能力が必要だということを教育の中で示していくなければなりません。

岡本：かつて青少年団体は、緩やかなプログラムで子どもたちに自由に楽しんでもらっていました。現在は安全面などを考慮し、きちんとした規則に沿ったプログラムを用意します。そうするとケガはしませんが、失

敗もしません。（生きる力を養うという意味で）これではいけないと思う反面、変えることができない背景もあってジレンマがあります。

加藤：子どもたちの保護者と情報共有し、ぜひ突破口を開いてもらいたいものです。阪神・淡路大震災を経験した兵庫県だからこそ、青少年団体には新たなイノベーションを展開する軸になってほしいと期待しています。



多様性を認め 共に生きる大切さ学ぶ



萩本 義郎

便利さの裏に潜むものに目を向けて

ネット依存症・不登校・いじめ等深刻な社会病理が進行しています。イノベーションにより大変便利に人と人とがつながるようになりましたが、その裏に潜むものに目を向けなくてはなりません。

不登校は、かつては孤独に引きこもるものでしたが、現在では、SNSやラインなどで他の人とつながっているので孤独ではないと言われます。また、集団の心理、異質な物に対する不寛容等、その人の好みや思想に、偏った操作をされた情報が集ま

る中で判断し行動をするようになってきています。とても恐ろしいことです。

これらに共通しているのは、現実の世界から学び、人として生きていくための基礎・基本を身につける必要があると言うことです。

情熱を傾け物事に当たり、失敗を積み重ね、様々な人の願いを知り仲間と共に進む生き方や、一人一人の個性や能力を把握し、その力を発揮できるよう工夫する重要性が問われています。

現実の体験が成長への原動力に

いえしま自然体験センターでは、ボランティアとして多くの若者たちが様々な事業に企画段階から関わってくれています。団体の理念をもとに、自然の素晴らしさや仲間の大切さ、命の素晴らしさ、支えてくれる方々

への感謝などを、どうすれば気づいてもらえるだろうか、参加する方々と共にプログラムを作り上げるにはどのようにすればいいのか、危険はないだろうか等、何時間も掛けて話し合いを続けます。また、自分自身の技

術や知識を高めるために訓練キャンプもおこないます。

情熱を持って取り組み、参加者の笑顔と「ありがとう」「楽しかった」「また来ます」などの一言で、やりがいや幸せを感じています。中には、別れ際に涙を流すボランティアもあります。この体験がやがて立派な社会人として成長していく大きな原動力となるのです。

このような体験の中で、様々な課題や考え方、感じ方を持った人たちと交わり、多様な考え方や課題を抱えた人たちがいることを体験的に捉えていきます。そして、多様性を認め共に生きていくことを学んでいきます。同時に、人と人とのつながりの大切さや、多くの人に情報を伝えることの難しさを知り、一番援助を必要としている人を基準にして図や文字で伝達の方法を考え、全ての人にわかりやすい、丁寧な方法を学んでいきます。

私たち青少年団体は、今、最も必要とされているものを提供できると考えました。

この人に取材！



(一財)野外活動協会(OAA)
子ども若者育成担当

ひのけんたろう
日野 健太郎さん



(一社)ガールスカウト兵庫県連盟
理事

みょうじょう よりこ
明星 順子さん

聞き手

速水順一郎

兵庫県青少年団体連絡協議会顧問

山崎清治

(NPO法人生涯学習サポート兵庫理事長)
兵庫県青少年団体連絡協議会副代表理事

Dialogue
No.4

体験は人をどう育むのか

**子どもの頃の体験は
今も楽しい思い出に**

山崎：青少年の健全育成をめざす団体の人材育成を考えるうえで、NS会議の二人を交えて子どもの頃の経験や日頃の活動などをうかがおうと座談会を企画しました。

速水：二人は日頃から青少年活動に取り組んでいますが、自分の子どもの頃はどんな過ごし方をしていましたか。

明星：小学1年生からずっとガールスカウトをやってきました。普段はできないキャンプなどに連れて行ってもらえる機会だと思っていました。

日野：塾、水泳、英語などの習いごとが忙しく、自営業だつ

たこと也有って、旅行に連れて行ってやれない代わりにと親がOAAに入れたようです。

山崎：習いごとといえば、今の子どもに人気なのはプログラミング教室だそうですね。

速水：ガールスカウトに入ったばかりの頃はどうでしたか。

明星：楽しかったです。友だちと楽しく過ごした記憶は今も残っているし、当時の友だちと現在でも会っていますよ。

日野：私も、とても楽しい体験をしたという思い出は強く残っています。

速水：青少年活動をしていて、

(本文敬称略)

NS会議とは——

兵庫県青少年団体連絡協議会に参画する団体のおおむね30～40代のメンバー12人で構成。次世代のリーダーを育成する場で、団体運営や組織マネジメントの研修や情報交換、ゲストを招いた勉強会などに取り組んでいます。

何が良かったと感じていますか。

明星：料理やキャンプ、裁縫、お茶の稽古などたくさんの貴重な体験ができるところです。さまざまな分野の入口をたくさんつまんで楽しさを積み重ね、自

NS会議メンバーと意見交換

青少年活動 子どもにさまざまな入り口提供 「体験」共有する友だちづくりに

分に合った世界を見つけることができます。

山崎：私もキャンプ団体に所属していましたが、うまくいかなかった思い出があるのになぜ楽しかったのか不思議です。

明星：楽しみも悲しみも、思い出として共有している友だちがいるからでしょうか。今は子どもの数が少なくて、昔ほど友だちが選べないように思います。結果、当たり障りのない人間関係を作らざる得ないのではないかでしょうか。

青少年活動の体験が大人になって生きる

速水：子どもの頃は家で自分の役割や仕事はありましたか。

日野：特にありませんでした。学校から帰るとテーブルにある食事を食べて、塾に行く。食器はそのまままで（笑）。ただ、OAAでは食事を作ったり食器を洗ったりと、きちんとしていました。

明星：私もキャンプでしか料理をしたことがなかったです。ガールスカウトで習った料理は今でも家で作っていますよ。

山崎：親が役割を与えればきちんとできるようになるのでし

ょうね。

日野：OAAの活動は生活にとても結びついていると、大人になって気づきました。炊事などが苦も無くできるのは子どもの頃に野外活動で学んだ成果だと感じています。

近所ネットワークは電子ネットワークに

山崎：昔は他人の子どもを叱る大人がいましたが、現在は本気で怒るか、怒らないかの二極。私が子どもの頃は、危険なことをすれば、ちょっと声をかけるように、ニコニコしながら注意する大人がいましたね。

明星：親からは「みんなが見ているからね」とよく忠告されました。いわゆるご近所ネットワークです。メールソフトもないのにすごい。

速水：電子ネットワークがなく、人の動きを注意深く見ていた世の中だったから、「目」のネットワークが生きていたのでしょう。

日野：現在は、（スマホを見て）周りを見ていない人が多いです。「だるい」「しんどい」「めんどくさい」を口癖にする子どもも増えました。



野外活動協会の日野さん

指導者、リーダーは驚異のマジシャン

速水：青少年活動をしてきた中で、すごいと思える人には会ったことはありますか。

日野：OAAでは指導者を担う人たちの一体感がすごいです。どんな質問を誰に聞いても同じ答えが返ってくる。まさにマジシャン。自分が参加したキャンプの資料を今改めて見ると、十分なミーティングを経てきちんと設定が練りこまれていたことが分かりました。

明星：小学生の頃、ガールスカウトのリーダーたちは危険な場面でも私たちに役割を与え、陰できちんと目を光させていました。これはとてもすごいことです。また、折り紙などその時に欲しい物を何でも持っているリーダーもいました。あらかじめ何が必要となるかを予測していたことが素晴らしいです。自

体験不足だが、デジタルは過剰 食わず嫌い系の子どもが増加

分たちにしてもらったことを、これからは時代に合わせてアレンジしながら次の世代に返そうと心がけています。

速水：現在の子どもは体験が不足していると言われていますが、どう感じていますか。

日野：自然体験などの機会は減っています。一方で、デジタル体験はとても頻繁で、過剰な状態とも言えます。例えば「夕日を見てきれい」ではなく、「夕日の写真を見てきれい」と思う

体験です。昔と比べて、体験の形式が変わってきているとも感じています。

山崎：確かに、ネットで探せば5秒以内に世界中のきれいな夕日の写真が見られますね。

速水：しかし、それでは規模を体感して感動することはできません。私たちの世代から見るとデジタルは体験の部類に入りませんが、若い人たちは体験の一つととらえているのかもしれません。



ガールスカウト兵庫県連盟の明星さん

日野：また、食べ物に限らず、食わず嫌い系の子どもが増えたように思います。ちょっとした印象で好き嫌いを決めてしまう。できないと感じることにチャレンジするのは苦手な傾向に

問題提起 デジタル技術は“体験”なのか

あるのでしょうか。

速水：できないということを他人に知られることが嫌なのでしょう。でも、その世代のみんなが同じ気質だから違和感なく思えてしまうかもしれません。

青団連は団体間の橋渡し役を担って

速水：兵庫県青少年団体連絡協議会をどのように思っていますか。意見をお聞かせ下さい。

明星：団体としての実態が見えにくく、少し周知が足りない

ように思います。活動団体の情報をたくさん所有しているので、団体間の情報共有といった橋渡し役を担ってもらえば。

日野：青団連に所属していない団体、他分野の団体などとの

つながりが希薄なように思います。青団連は青少年問題で困った時に頼りになる組織ですが、いろんな団体とつながり、連携していくことでより強みが増していくと期待しています。



実社会の経験

次世代に伝えよう



速水 順一郎

世代の“体験ギャップ”どう埋める？

青少年団体活動は幼児期の会員からシニア世代の指導者まで、幅広い年齢層が活動を行っています。

世代が違うと体験に大きな違いが出てきます。

当たり前のように物が身近にあり、苦労しなくとも手に入る事が当たり前な人々は、工夫することや応用する機会が少なく、ものの大切さに麻痺しています。

デジタル化が進み、様々な自然物や草花、昆虫、動物などの生き物の姿が見事に本物のように見ることができます。

友もスマホでつながり、出会

わなくともリアルタイムで連絡しあうことができます。

一方で、シニア層は、もの自らの手で作りだし、道具もあるものを工夫して使う体験を数多く積んできました。

四季の風景の移り変わりを肌で感じ、木や草花で遊び、虫を追いかけ、動物などの生き物は家畜を別にして動物園や水族館に行かなければ見ることができませんでした。

親友といわれる友と出会い、末永く友情が培われました。

この体験の違いをどう理解し、活動に取り組めばよいのでしょうか。

疑似体験と本物の違い理解する機会を

どの世代においても、活動の経験が体験につながり、経験のない人よりも豊かなことは間違

いありません。

リーダーとの出会いが不思議な魔法使いとの出会いのように

魅了されることもあります。

一緒に活動することによって、仲間のきずなが深まります。それらをより豊かにするためにお互いに目線を合わせて、活動に取り組むことが必要です。

経験を積んだ指導者は、経験の押し付けではなく、わかりやすく理解ができるように心がけましょう。例えば、スマホで見たカブトムシが本物との違いを体験することや、紅葉の景色が実際に落ち葉を踏みしめる感触との違いを実感できる機会を通じて、経験を伝えましょう。

スマホ世代から学ぶ心も大切です。経験を積み重ねてきた指導者が若者や子どもから学ぶことはいっぱいあります。

活動を共にするみんなが、お互いに認め合い、活動を進めることができ、人が育つ活動につながるでしょう。

青少年活動に関する調査研究事業について

兵庫県青少年団体連絡協議会は平成 24 年度より、(公財) 兵庫県青少年本部の助成を受け、青少年活動に関する調査研究活動を行っています。

2012 年度 (H.24)	『子供の頃の体験が大人になって、どのような影響を及ぼすか、に関する調査～未来へはばたく子どもたちのために～』 「あそび」や「仲間との体験」、安定した家庭生活が成人後より豊かな暮らしの源泉。協調性、リーダーシップ力、冒険心、体力、集中力、創造力、いたわりの心などが身に付いた。
2013 年度 (H.25)	『青少年団体活動に関する親の意識調査～団体活動のこれからに向けて～』 「体験重視で、いろんな活動ができる」「異年齢の人とともに活動」「子どもが主体的に考え行動する活動」「日常では出来ない体験」などの意見。アンケート回答者の約三分の一が母子、父子家庭であった。
2014 年度 (H.26)	『県内企業・事業所の青少年の健全育成に関する意識調査～求められる青少年活動のこれから～』 調査対象 345 社のうち 121 社より回答。80% の事業所が社会貢献活動を手掛けており、採用時に地域活動、ボランティア活動などを積極的に評価するは 65%。今後更なる青少年活動の P R を。
2014 年度 (H.26)	『そなえよつねに』青少年団体への提言 阪神・淡路大震災の経験と教訓を語り継ぐ大切さと防災・減災に向けて、「話を聞こう」「本を読もう」「コミュニケーションしよう」「街を知ろう」「道具を使おう」「五感を鍛えよう」「避難訓練をしよう」「一人で生活する体験を重ねよう」の 8 つをテーマに提言。
2015 年度 (H.27)	『青少年活動がもたらすもの～リーダー体験者に聞く～』 当時の体験がその後の社会人として役立った。このような経験を子どもたちや後輩にも期待。今もリーダーを演じている自分～これが青少年活動の根幹かも。
2016 年度 (H.28)	『子どもの手さばき等の調査～求められる、そして効果的な体験活動の展開に向けて～』 箸で豆をつかむ。ぬれぞうきんを絞る。ナイフで鉛筆を削る。のこぎりで木を切る。目を瞑って 30 秒を数える。ひも結びなど 10 種目。メカニックな遊びに慣れた子どもたちが調査を自らの腕試しとして楽しんでいたのが印象的。「結び」は出来ない。
2017 年度 (H.29)	『次世代につなぐ青少年活動～青少年団体の歴史をふるかえり、これからを模索する～』 社会のニーズから生まれた青少年団体。搖籃期、成長期、発展期、成熟期、衰退期、先人たちは社会の変動を乗り越えつつ活動を継続してきた。青少年活動はこれから何を目指していくべきか。
2018 年度 (H.30)	『これからの青少年活動、さらなる展開と推進～これからの青少年活動の在り方を模索～』 子ども・若者がこころも、からだも、健康に育つために、行う活動＝青少年活動と規定。最も大事なことは、いろいろな“体験”を通じて“生きる力”を養うこと。そのために指導者の質と量を確保すること。
2019 年度 (R.01)	『人が育つ』青少年活動の果たす役割～アクションプランの策定に向けて～ 少子高齢化、人口減少社会において青少年を含む全ての世代が互いに関わり合い、共に健康で健全な社会を目指すなかでの青少年活動の位置づけを明確にし、シニア世代の活躍にも期待。

※詳細は兵庫県青少年団体連絡協議会のホームページ (<https://seidanren.net/>) で紹介しています

提 言

『人が育つ』青少年活動の果たす役割 ～アクションプランの策定に向けて～

青少年団体への参加者の減少や指導者の確保に苦慮する今、いま一度団体の使命を再認識するとともに、社会のニーズに配慮した活動を展開するために、組織の在り方や活動内容等を変化させなければならない。

今回は指導者に焦点をあて、青少年団体がアクションプランを作成できるよう提言を行います。

1. 一人ひとりの個性が輝く指導を

団体活動に参加するメンバーは一人ひとり違います。一人ひとりに合った指導ができるよう指導者の資質の高揚を図る必要があります。そこで、団体は指導者の経験と視野を広げることができるように配慮し、団体内部だけではなく、他団体と連携して指導者の育成に取り組みましょう。

2. ゆとりを持った指導を

メンバー同士で議論をすることや考える機会を大切にしましょう。そのためには、よきファシリテーター（促進者、円滑な進行役）になることが重要です。団体活動は集団で実施するメニューが中心ですので、集団で決定したことを実行できるよう目配りも必要です。

また、メンバーが自身の力で自分の行動を決め、それに基づいて行動する力を身につけるための後押しができる能力も求められます。

集団や個人で決定したことが必ずしもうまくいくとは限りません。うまくいかなかつたことから学ぶ視点を持った指導力も身につけましょう。

3. 直接体験と間接体験のバランスを

電子ツールがあふれる今、あらゆる情報を容易に入手することができます。しかし、リアル体験の大切さを認識する必要があります。五感（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚）で本物を体験することは、人間の本来持つ機能を磨き、コミュニケーション能力の向上にもつながります。そこで、バランスよく体験ができる指導力を身につけましょう。

兵庫県青少年団体連絡協議会について

【発足】

1967年、初代役員に会長、今井鎮雄氏（神戸YMCA総主事）、副会長に前田薰氏（野外活動協会事務局長、以下O A A）、高木正徳氏（ボーイスカウト兵庫連盟理事長）が就任し、兵庫県内で活動する青少年団体23団体で発足し、加盟団体の自主性、主体性を尊重しながら相互に連携し、健全な青少年の育成を目指してスタートしました。

【幹事会発足、兵庫県青少年局との協働】

戸隠キャンプ、若人の祭典、海外青年受け入れ事業などを実施、1984年には幹事会を設置し、これから青少年団体や協議会としてのあり方、また活動について継続的に、また定例的に検討する機会を持ちました。さらに、兵庫県青少年局からの事業企画や研修会、研究事業などにも積極的に取り組みました。

【組織化と加盟団体での自主運営と県青少年本部との連携】

1997年、山口徹氏（神戸YMCA総主事）が会長に就任、清水勲夫氏（O A A事務局長）、速水順一郎氏（兵庫県子ども会連合会事務局長）の両副会長と共に組織と活動を検討し、毎月1回の運営委員会や兵庫県青少年本部との定期的な懇談会も開催するようになりました。

【兵庫県青少年本部との更なる連携と協働】

2012年より兵庫県青少年本部より委託を受け、調査研究事業を実施しています。また同本部との共催、協力による指導者養成事業、ひょうご青少年活動フェスティバルを実施しています。

【再組織化の協議と実施】

発足から50年が経過し、各団体の代表者も交代、時代の変化とともに求められる青団連のあり方について、2017年から協議を開始し、2018年はミッション、ビジョンなどの再定義の協議を重ねながら、今後の協議会のあり方や規約、運営体制を見直しました。

【兵庫県青少年団体連絡協議会の理念】

青団連は、兵庫県内で活動する青少年団体の自主性を大切にした、行政に頼らない自立的なネットワークです。子どもたちが健全に成長する兵庫であるために、心身ともに健康に育つ環境づくりや体験活動を提供する青少年団体の活動が存続し活性化し充実していくことをさまざまな形で支えています。

具体的には、他団体との交流機会の提供、青少年活動の研究や周知、次世代人材の育成、行政との協議などを行い、加盟団体の社会的認知を高めることで兵庫県内における青少年活動業界全体の発展に寄与しています。

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究委員会

委員長	山崎 清治（生涯学習サポート兵庫 理事長）
委 員	速水 順一郎（兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問）
委 員	鈴木 武（日本ボーイスカウト兵庫連盟 理事長）
委 員	岡本 光司（兵庫県世界青年友の会 会長）
委 員	萩本 義郎（いえしま自然体験協会 業務執行理事）

『人が育つ』青少年活動の果たす役割
～アクションプラン策定に向けて～

発行日 2020年3月

編集・発行 兵庫県青少年団体連絡協議会

神戸市中央区下山手通4-16-3

兵庫県民会館8階

(公財)兵庫県青少年本部 活動支援部内

Tel 078-891-7410

協力 (株)兵庫ジャーナル社

神戸市中央区下山手通4-6-13

Tel 078-333-7560



兵庫県青少年団体連絡協議会 2019年度 加盟団体 23団体(順不同)

兵庫県連合青年団	一般社団法人 兵庫県子ども会連合会
日本ボーイスカウト兵庫連盟	一般社団法人 ガールスカウト兵庫連盟
一般財団法人 野外活動協会（O A A）	兵庫県BBS連盟
兵庫県ユースホステル協会	一般社団法人 神戸青年会議所
公益社団法人 日本青年会議所近畿地区 兵庫ブロック協議会	兵庫県スポーツ少年団
兵庫県青年国際交流機構（I Y E O）	兵庫県商工会青年部連合会
公益財団法人 神戸Y M C A	公益財団法人 神戸Y W C A
一般社団法人 神戸フットボールクラブ	兵庫県青年洋上大学同窓会
一般財団法人 兵庫県少林寺拳法連盟	兵庫県緑の少年団連盟
兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会	兵庫県世界青年友の会
一般社団法人 神戸国際支縁機構	特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫
一般社団法人 いえしま自然体験協会	

ひょうご青少年憲章

平成12年3月制定

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にありますが、先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。

私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、そしてかけがえのない地球に生きる人間として、ひょうごの明日を担う青少年とともに、自信と夢と勇気をもって21世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

- 1 自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていくこう
- 2 ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていくこう
- 3 人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていくこう
- 4 多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていくこう
- 5 自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていくこう
- 6 先人に学び、明日に夢をえがき、勇気を持って未来を拓いていくこう